Vol.2019-ASD-16 No.3
2019/12/6

介護記録分析の内容とその効果

田中　克明
コクヨ株式会社

介護現場で日々記録されている介護記録は、その場での申し送り等に使われるが、全体を俯瞰したような使い方はされておらず、うまく活用されていないのが現状である。今回、複数の介護施設で記録を収集し、分析した結果を共有すると共に、この分析結果を見た介護現場がどのように変化したかを報告する。

研究の背景

少子化、超高齢化が進んでいる日本において、介護保険制度は厳しさを増している。厚生労働省は、個々の利用者が、そのニーズに応じて、多様なサービスを比較しつつ、最適なサービス選択を行えるよう支援するには、介護分野においても科学的手法に基づく研究を進め、エビデンスを蓄積し活用していくことが必要であるとし、2018 年に『科学的介護』を導入し、客観的かつ信頼性のあるエビデンス（科学的根拠）のある介護サービスの導入を進めるための検討会を開催した。その中心となるのは、「CHASE（Care,Health Status & Events)」と呼ばれるデータベースで、「介護ＤＢ（介護保険総合データベース)」と「VISIT（訪問・通所リハビリステーションのデータ収集システム)」から成り立ってる。

一方で、静岡大学の研究チームは認知症ケアの研究から、生活は個人ごとに異なるため、当事者のパーソナリティ、身体的状況や精神的状況、家庭や地域における暮らし方を理解しながら支援につなげる必要があるとし、介護記録を分析しその結果を介護現場の学習に効果があることを見出した。

研究の目的

様々な介護サービスで日々記録される介護記録は、その場の申し送り等に使われるが、中長期に俯瞰したような使い方はされていない。ベテランと言われる介護職は、これら記録を自身の記憶として全体像を把握し、日々の介護行為を導き出していると想像する。厚生労働省が進めている「CHASE」では、リハビリデータが基本として使われ、個々人のパーソナリティや暮らし方といった情報を活用する仕様ではない。ＡＤＬが向上するには、その個人ごとの動機付けが必要であり、そのためにはパーソナリティや暮らし方の情報は不可欠である。しかし、これら情報は容易に収集することは不可能であり、日々の対話やしぐさを注意深く観察する力は求められる。介護の現場では、こういった対話やしぐさを記録している例は少なくない。ただし、これらの記録を上手に活かし、パーソナリティや暮らし方に展開できていない。そこで、本研究では、日々の記録を収集分類して、個々人のパーソナリティや暮らし方、生活動作の改善を見える化し、介護の実践にフィードバックする方法を見出す。

ⓒ 2019 Information Processing Society of Japan

研究の手法

介護現場で実際に書かれている介護記録、現場メモを取集、データ化し、分類、分析する。対象となる介護サービスは、１．訪問介護、２．デイサービスの２つとした。

データ化した介護記録は、以下の手法で分類、分析した。

１．訪問介護

①研究者自身が記録を読んで分類（介護者行動/介護サービス定義/利用者行動/利用者対話/IADL 記述、等）

②テキストマイニングツールで分析（ワードクラウド/感情推移、等）

２．デイサービス

①研究者自身が記録を読んで分類（介護者行動/介護サービス定義/利用者行動/利用者対話/IADL 記述、ＩＣＦ分類）

②テキストマイニングツールで分析（ワードクラウド/感情推移、等）

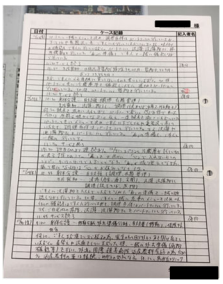

図１　訪問介護事業所のケース記録

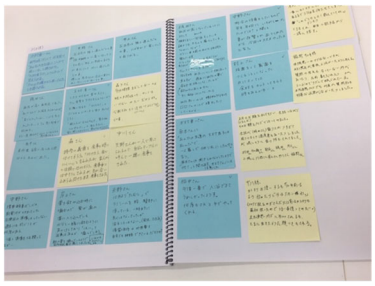

図２　デイサービス事業所の現場メモ

結果

１．訪問介護

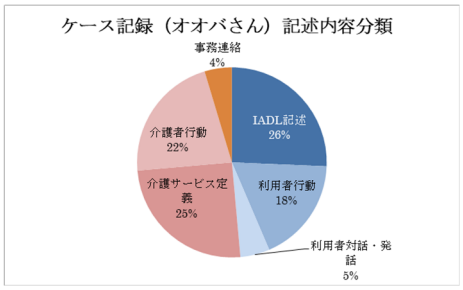

図３　訪問介護事業所のケース記録記述内容分類

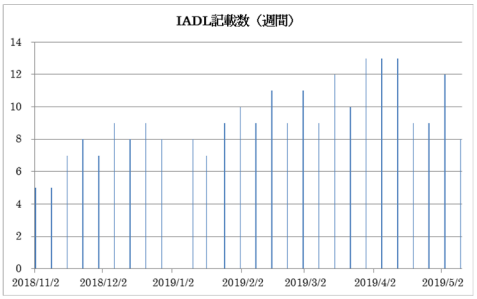

図４　訪問介護事業所のケース記録 IADL 変化

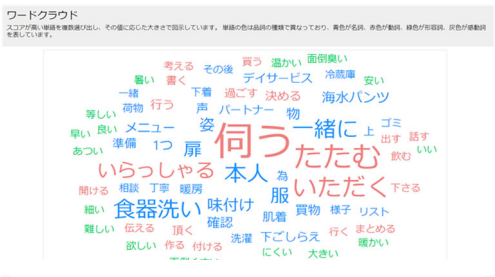

図５　訪問介護事業所のケース記録ワードクラウド

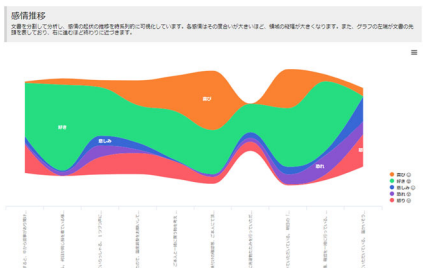

図６　訪問介護事業所のケース記録 感情推移

ⓒ 2019 Information Processing Society of Japan

２．デイサービス

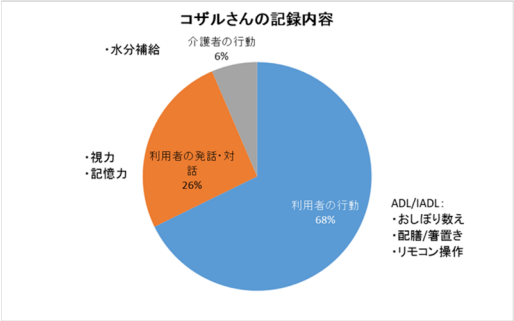

図７　デイサービスの現場メモ 記載内容

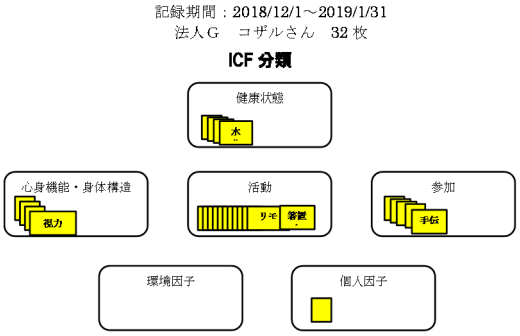

図８　デイサービスの現場メモ ＩＣＦ分類

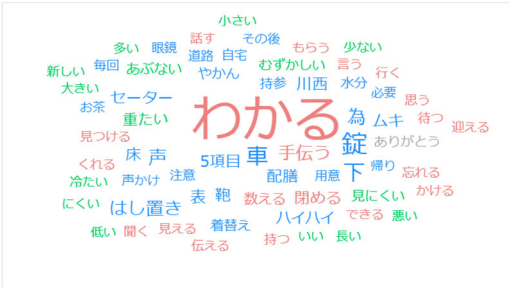

図９　デイサービスの現場メモ　ワードクラウド

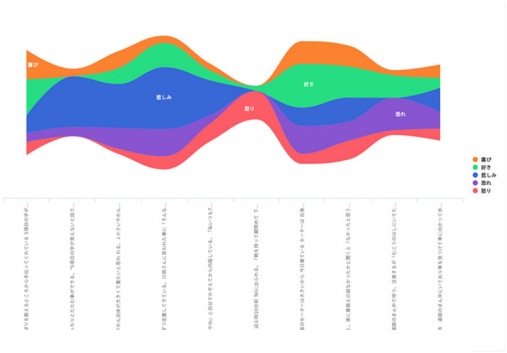

図１０　デイサービスの現場メモ　感情推移

考察

訪問介護記録の中長期的視点の分析から IADL が順調に増えている（上がっている）事実が明確になった。しかし、なぜ上がったのかが記録から見えてこない。この結果を当該介護事務所に持って行き説明したところ、この IADL 向上の背景、すなわち利用者のパーソナリティについての意見が出た。これにより、根拠と結果とが結びついた。テキストマイニング結果から、喜びの記載が多く、これは、IADL 向上に起因していると想像できる。

一方デイサービスの介護メモをＩＣＦ分類すると、図８のように当該利用者への記述は“参加”に関係することが多かった。次に感情推移を見ると“怒り”の感情が少ない。したがって、参加が多い人は、怒りが出にくいと推測できる。

結論・課題

結果からわかるように、記録を分析することで、利用者のパーソナリティや暮らし方の一端を垣間見ることができる。このように、日々の記録を中長期的視野で見ることで、利用者のパーソナリティや暮らし方を把握し、現場の介護行為にフィードバックし、さらに評価し、見直す行為を繰り返すことで、利用者をより深く理解し介護の質的向上に貢献できる。今回、分類分析を一部人力で行っているため、早期にシステム化することが求められる。

ⓒ 2019 Information Processing Society of Japan